

復活光州「民主の聖地」は熱く燃えた

ソウルで飛び乗るようにして発ったKAL国内便が、光州の滑走路に降りついた。地方空港なので、金浦に比べれば田舎の雰囲気だ。わたしたちは、第四回目の東アジアの平和と人権シンポジウムに参加するために、成田を朝一番の便で飛び立ち、ソウルの金浦空港で韓国側スタッフの準備した搭乗手続きに従って光州行きの国内便に、急いで乗ったのだった。

光州は初めてではない。八二年はソウルから高速バスで、八三年は釜山からやはりバスに乗ってこの都市に入った。そういうわけで、光州空港は初めてだ。しかし、あまり大きくはない空港施設はこぎれいできっぱりしている。わたしたち日本代表団を待ち受けていた韓国事務局の方々に促されて、ホテルに向かうバスに乗り、何気なく窓の外を見ると、「民主の聖地光州」の横断幕が張られているのではないか。かつては光州に入るバスは軍人による検問を受け、小銃を構えた兵士がバスの奥まで入ってきたものだった。街は殺伐として、人々は口数も少なく、暑い夏の陽差しの下で悶々と生きていたようだったのだ。

無等山の中腹にあるホテルに到着して、部屋に入って落ち着くと、父の形見のジャケットをバスに忘れてきてしまったことに気がついた。直ぐにロビーに降りてボランティアの女子学生に告

げると、バスに連絡を取ってくれた。このときは少し焦ったので何度も催促してしまったが、食事をしたあと、市内の光州公園に向かうバスに乗り込もうとすると、迎えに来たバスの運転手が持ってきてくれた。ここでまず「韓国の学生親切でえらい」と感謝。

この日は五・一八光州民衆蜂起二十周年前夜祭である。私たち日本からの参加者を含む二万人のデモ隊は、光州公園を出発し、五・一八の再現を意図して錦南路へと進んだ。「日本天皇訪韓反対」の横断幕を持って進むと市民から拍手で迎えられ、中心部に進むに連れ拍手は大きくなる。はるか前方では火の玉が光って揺れている。遠かった火の玉もすぐに近づき、わたしたちの列にもたいまつが渡される。角材の頭に針金でくくりつけた石油の沁みた布くずに火をつけているのだ。

デモ隊は多くのフラッシュを浴びる。沿道からは拍手の嵐。その中に、光州ビエンナーレの「人権と芸術」展責任者として来韓している針生一郎が、だるまのような笑顔を見せていた。

道庁前の特設舞台では、「五月光州」という創作パンソリが歌われた。そのあとさまざまに出し物があったのだが、わたしはデモの後疲れてしまった友人に従って、パンソリの途中で舞台から離れてしまったので、喜納昌吉とチャンプルーズやアン・チファンの歌を聞くことができません。すこし残念だった。

翌日は荷物を持ってバスで移動。「五・一八自由公園」は、民衆蜂起当時全斗煥の戒厳軍が市

警本部をおいたところで、逮捕された市民や学生たちが過酷な拷問を受け、收容された場所でもある。現在は歴史遺産として営倉や法廷などが復元されている。

次にわたしたちは、戒嚴軍による鎮圧で犠牲となった尊い命の眠る望月洞墓地へ向かった。この日は金大中大統領が来て追悼の挨拶をするということもあって、たいへんなひとだかりだ。見渡す限りの広い墓地だから、一人で来たらどこがどこだ分からないだろう。旧墓地に入る小道になにやら埋められていて、さつきからみんなわざわざ踏んで行くようだ。よく見るとハングルで「전두환」と刻んであるようだ。전(全)の字は殆ど分らないが、두환(斗煥)ははっきり分かる。気がついたわたしが「これ全斗煥と書いてあるんですよ」と誰にもなく言うと、沖繩の知花さんが、いかにも納得行ったというふうに「そうか。それでか」と頷いた。知花さんは天皇制の沖繩人民への押しつけに反対して、掲揚されようとする日の丸を焼き払ったりして、米軍基地に反対した運動家として知られる。ボランティアの説明を聞くと、全斗煥がこの近くに来たとき記念に建てた石碑なのだそう。それを引き倒して墓地に入る小道に埋め込み、人々が踏んで行けるようにしたのだ。この墓地には、五・一八民衆蜂起のときや、その後の民主化運動の過程で倒れ死んだ人々の墓がある。旧墓地と新墓地に分かれていて、五・一八で殺された人々の遺骸は、今は新墓地に移されている。

土饅頭の前に高さ三〇センチほどの小さな石碑が建っている。中には腹を引き裂かれ、胎児を

引きずり出されて死んだ若い母親の花嫁姿の写真が飾られてあったり、身元が分からないほど焼けこげた顔写真が置かれていたりしている。全斗煥と盧泰愚の裁判のときの写真が置かれていていゝのもあった。どうやら死者にたいして、あなたを殺した奴は逮捕されたよと示しているらしい。

詩人金南柱の墓もここにある。民主化運動の中で死んだ農民詩人だ。夕べの前夜祭にも出演したアン・チファンという若い歌手が最近、金南柱の詩を歌ったアルバムを出した、と聞いたので、後でこれは買いに行った。

旧墓地から新墓地まではカラフルなリボンに沿って行けば良い。新墓地では金大中大統領が哀悼の辞を述べたあとだった。光州特別法（一九九五年十二月）によって、政府は五・一八民主化運動を継承する記念事業を推進しなければならないことになっている。全国各地から光州民衆抗争二十周年墓参団がバスで集まっている。一九四八年に白色テロリズムの餌食になった済州島からも、バスで大勢乗り付けている。広大な墓地だったが、奇跡的に「迷い大人」がでず、これも献身的な学生ボランティアのおかげと思いつながら、芝生に腰を下ろして豪快な弁当を頬張った。

墓地における五・一八記念行事はまだまだこれから、広場ではいろいろな出し物があるのらしいが、シンポジウム参加という目的で来ている、時間のないわたしたちは、食後すぐにバスで移動。光州から東へ移動して、求札から智異山に入っていく。智異山は戦後アメリカ帝国主義と李

承晩分断政權に反対したパルチザンたちが根拠地とした深山で、朝鮮戦争のさいには退路を断たれた北朝鮮軍もここに立て籠もって闘った。私たちを乗せたバスは蟾津江に沿って昇っていく。パルチザンや村民たちの血で染まった川だ。趙廷來の大作『太白山脈』でも智異山はゲリラ闘争の主要な舞台として描かれている。

大成コルというところで、いったんバスを降りる。辺りは登山口とあって、売店と民宿が並んでいる。そして下には蟾津江が流れる。ここで当時の南朝鮮労働党員の話聞く機会を得た。この谷は一九五二年一月十七日、数百名のパルチザンが討伐隊の砲弾によって死に追いやられた場所だ。「反共」を国是とする韓国で、労働党員を名乗る人間が堂々と人前で話をしているというだけで感動的なのだ。続いて、ソウル教育大で民主化闘争に参加し、自殺した光州の娘パクソニョンのオモニ（母）が紹介された。夫は後ろの方で控えている。

ノゴダンという峯の麓で統一祈願の舞が行われるというのでバスで移動。姜惠淑（カンヘエスク）教授指導の舞踊チームが躍動する。若い女性たちの舞は実に美しく感動的でさえあったが、一五〇〇メートルの高さはさすがに寒く、震えながら見ていた。急な山道は暗くなると危険というので、急いで宿舎に向かった。

宿舎は「韓国通信智異山研修所」という名前だけしか知らされていなかったもので、企業の研修所ではたいした設備でもないだろうと、あまり期待はしていなかった。むしろふとんが足りなく

て寒いと嫌だななど思っていた。ところが、シンポジウムの行える広い階段講堂はもちろん、サウナ室、スカッシュコート、ボーリング場、卓球場から、カラオケ室や子ども遊び場などの設備や売店がそろっている。屋外プール、野外音楽堂などもある。部屋も高級ホテルなみと言える。食堂はバイキングというか、韓国式社員食堂形式なのだろう。順に並んで好きなものを好きなだけ取っていく。キムチは毎食並んでいる。デザートも取り放題。

この夜は文化交流の夕べとして、各国の詩の朗読や歌が披露された。台湾の少数民族の歌は素晴らしかった。「飛魚与雲豹工作隊」というグループで、前日の八・一五前夜祭にも出演したプロだが、わたしはデモの後早くホテルに帰ってしまったので、彼らの歌は初めて聞いた。あまりに素晴らしかったので、あとでCDを譲ってもらった。ちなみに彼らは胸に「中国」と書かれたお揃いのTシャツを着ている。統一派なのである。

翌日からのシンポジウムは盛会であった。簡単には紹介できないが、「東アジアと光州」「東アジアの戦争とジェノサイドの経験」「歴史・記憶・記念館」「国家暴力とトラウマ、家族と女性の苦痛」「二一世紀南北統一と東アジア平和」「東アジア平和―人権連帯の意味と展望」の六つのセッションが置かれてそれぞれ論文が発表され、意見が交換された。最近、朝鮮戦争時においてアメリカが非武装の避難民などを大量に虐殺していた事実が公表されたこともあって、良民虐殺の追及は力が入っている。だからといって韓国人が犠牲者になったという話だけでなく、ベ

トナム戦争における韓国軍による虐殺にも言及している。たんに被害者としての主張だけではないのだ。シンポジウムの詳細については、報告集が発行されることになっているので、参照されることをお勧めしたい。日本からは武藤一羊、藤元治、沖繩の知花昌一らの報告があった。知花は光州の民主主義運動弾圧に、アメリカばかりが日本政府が手を貸し、奨励さえした事実をあげて、光州民衆蜂起を継承する運動は日本に向けられねばならないと、自国政府を強い態度で批判した。これがわたしたちの人権運動のあるべき態度なのだ。北海道の在日韓国人民運動家である林炳沢氏の入国が拒否されたことは、残念なことであった。当然われわれシンポジウム参加者は抗議声明を発表した。

十九日夜の「ハルモニたち、ハラポジたちとの対話」は参加者に大きな感動と痛みを分かち合った。 「従軍慰安婦」であった女性たちは、日本帝国主義によって、日本軍の性奴隷として扱われた人たちであり、観衆の前に身をさらすことだけでもどれだけ勇気のあることか察せられるのに、重い口から出てくる言葉に私たちは辛い思いを禁じ得ないのだった。

ハラポジたちとは、共和国軍の軍人として朝鮮戦争のときに捕虜となったり、南朝鮮労働党の党員として活動中に逮捕され、三十から四十年近い懲役期間を非転向で貫き、最近出獄したお年寄りたちだ。壇上に並んだ十一人を合わせただけでも懲役三百五十年を超える。台湾から参加した林書揚さんら非転向長期囚や、韓国の民主化運動のなかで獄に繋がれた人々を足すと、ここに

集まった人々の懲役年数は、五百年を遥かに超えるだろう。

光州ビエンナーレも素晴らしかった。その日の朝から夕方までシンポジウムをさぼって、智異山の宿舎から光州市内までタクシーをとばして一時間半。作家のAさん、英文学者のMさん、人権救援団体ボランティアのTさんとわたしの四人だ。Aさんはいわゆる全共闘世代だが、わたしを含めた他の三人は、それぞれ五五、五六、五七年生まれと同世代で、女性のTさんが一番若い。ビエンナーレ会場の公園は広大で、ビエンナーレ館のほか、市立民俗博物館、市立美術館、文化芸術会館、科学館、教育広報館などの建物のほか、運動場まで揃っている。わたしたちが広い駐車場からビエンナーレ館をめざすと、ながい小学生の列が続いている。わたしたちが日本語で喋っていたせいか、「あ、日本人だ」とか、「どこからきたんですか」などと声をかけてくる。会場に入ると最初に驚いたのは、ギザギザの長い棒が横に突き出ている作品。これは何だろうみんなで首を傾げていると、どこからともなく、小柄のおばさんが現れた。——館内は案内の若い女性がほとんど細かい展示室ごとに居るのだが、年輩の女性はこの後見あたらなかった。おばさんは棒の突き出ている壁の反対側にまわるように私たちを導き、流暢な日本語でこの作品が日本人の作品で、神戸小学生殺人事件の犯人と被害者のそれぞれの母親の気持ちを表しているのだと、説明してくれた。その日本語が妙に説得力があって、納得させられるものだった。

全般に、ヨーロッパの作品よりも、中国やアジアの作品に力を感じた。時代はアジアなのだろ

う。ちなみに「芸術と人権展」の責任者は日本人の針生一郎だったが、針生さんをモデルとした絵も展示されていて、少し情けない表情のひげ面の老人の絵には、「亡命者」というタイトルがつけられていた。

あまり時間のないわたしたちは順路を急いだが、行動のゆっくりなAさんは遅れがちで、そのうえ、順路を間違えて一つコースを漏らして先に行ってしまったので、私たちも後を追いかけて一つコースを省いてしまった。それでもAさんとMさんはおじさんふたりで仲良くゆっくりだ。せっかちなわたしが出口にたどり着き、みやげもの売場を物色してまった。結局二時間半ほどかけてビエンナーレ館はほぼ見終わったが、他館は諦めることにした。他館では、北朝鮮の美術展や在日韓国人による美術作品の展示があったのだが、一日かけてもすべてを観ることは無理という感じだった。

美術作品だけ見ているのも何だからということで、会場近くの中華料理店でうどんを食べ、ビールを一杯ひっかけたあと、無料シャトルバスで市内に向かうことにした。バスに乗ると先に乗っていた数人の年輩の男性客たちから、「外国の客だ……」とか、Tさんを見て「女なのにたいしたものだ」などと言う声が上がった。運転手も親切だ。終点の道庁前でわたしたちが記念写真を撮っているとき、運転手が降りてきてシャッターを押してくれるばかりか、民衆抗争犠牲者の遺体を安置した尚武館という建物を教えてくれ、その前で写真を撮るように勧められるのだ。

光州の市民はいたって親切である。真の民主主義というものは闘ってこそ得られるものだ。光州が「民主の聖地」と自称するには理由があるのだ。私たちは街を歩き、CDを買ったり、喫茶店に入ったり、前夜祭デモの出発点だった光州公園や、光州学生独立運動記念塔、良洞市場などを急いでめぐり、五時にはバスターミナルに向かって求礼までバスに乗った。その間、市民の親切には、銀行でも公園でも何処でも遭遇した。バスの車中では、路傍でMさんが安く購入したア・シ・チファンのテープ（海賊版）を、走行中にかけてくれるようにお願いすると、運転手は快く承諾してくれた。求礼のバスターミナルで下車し、タクシーに乗り換えて帰ろうと思ったのだが、市内と違いタクシーがあまり走っていない。困っていると、走っているタクシーからおじさんが下りて来て、私たちが先に乗せてくれた。「平和と人権シンポジウム」やビエンナーレなどの八・一五関連行事で光州に来ている外国人と分かれば、光州の市民は私たちを優先してくれる。心苦しいばかりだが、非常に有り難かった。

夕食の時間が終わろうとする時間ぎりぎりに智異山の宿舎にたどり着いた。

今回のシンポジウムは最後に全体会がもたれ、全員での総括会議が行われたが、これは大きな成果を生んだ。特に日本から参加した在日の若者の発言には心打たれるものが多く、次回の開催場所の件になると、朝鮮籍の若者から「是非平壤で！」との声が上がって拍手喝采を浴びた。

送別の宴は野外音楽堂で開催。豚の丸焼きの匂いに誘われて早めにテーブルに着き、一杯やっ

ている内に、芸達者な参加者たちが次々に登場。沖縄の参加者は通訳や若者たちを巻き込んで歌えや踊れの大騒ぎ。台湾の「飛魚与雲豹工作隊」も三度目の登場。歌い終わるとボーカルの若い男性とツーショットで写真をせがむ女性たちも少なくなかった。韓国人も人を楽しませるのが得意なようだ。そして台湾代表団がインターナショナルを歌うと三カ国語のインターが発発状態になった。このときばかりはわたしも壇上に上がって肩を組んだ。まさか反共国家韓国でインターナショナルを歌うとは思わなかった。

誰かが、パクソニョン烈士のオモニであるオヨンジャさんに折り畳みの日傘を上げたらしい。オヨンジャさんは、「持つてなかったのよ。こんなのが欲しかったのよ」と言っ、身振り手振りも大げさに喜んで、ついにはわたしの手を握っ、お餅を持ってきたから車まで取りに来てよ、と離さない。オヨンジャさんは、娘が死んだあと、学生たちや民主化運動団体の間をまわり、娘がしたことを学び、今や本人が民主化運動の闘士となっている。

このオヨンジャさんから貰った名刺には、赤く小さいと言っ、いいほどの家の前に立つ夫婦の姿が遠写しに写っている。左肩には「少義齋」と書かれている。少しの義理も忘れない家ということらしい。裏には死んだ娘、パクソニョンさんの笑顔がまぶしい。

送別の宴は終わりを知らず、しかし中年になったわたしは疲れたので、十二時過ぎには部屋に戻った。それもつかのま、すぐに隣の部屋に呼ばれて再び酒を酌み交わした。ロビーなどにたむ

ろした人々の声はいつまでも続いている。結局わたしは朝四時には蒲団を被ったが、ボランティアの若者たちを中心に徹夜した人々も多かったようだ。

二時間ほど眠って六時に起床、地下のサウナ室でシャワーを浴びて風呂に入り、目を覚ましてから食堂に向かうと、フロントの前で福岡教育大のKさんと会った。彼女は妙にニコニコしていて、「徹夜してもう朝早く華厳寺に行つて来ましたよ」と言うのだ。かなりテンション上がっている。彼女は現地集合、現地解散なので、たぶんこの後光州へ行きビエンナーレを観てからソウルに行くのだろう。

わたしは「月曜東京着予定組」八人の引率者に選ばれてしまったので、智異山最後の朝食を食べたあと、華嚴寺經由光州空港行きバスに乗り込んだ。光州空港の食堂で冷麺を食べていると、台湾のグループが入ってきたので、拍手で迎える。わたしたちが出ていくときには、「再見」を叫び手を振った。

その日の夕方、十六年ぶりに束の間のソウルを散歩していると、戦闘警察の大部隊が待機している。遠くでデモ隊の音がするので、そちらの方に行つてみることにした。デモ隊は学生の隊列で、韓国戦争時におけるアメリカの良民虐殺を糾弾し、「五・一八光州虐殺」に対する責任を追及している。日本では考えられないほどの大勢が列を作っていて、リーダーに従って整然と行動している。デモ隊の向こう側には盾を持った警察が並んで規制している。デモ隊は「平和デモを

保証しろ!!」 「暴力警察帰れ!!」 とシユプレヒコールを上げた。

学生たちと握手を交わして、翌朝にはもう成田に向けて飛んでいた。デモに始まりデモに終わった旅だったが、多くの得難い経験をすることができた。

(『市民じやくなる』第61号 二〇〇〇年八月八日)